

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

2022 年 4 月 25 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局: 理学研究科・物理学・宇宙物理学専攻

職 名: 教授

氏 名: 山本 潤

助成の種類	令和3年度・国際会議開催助成		
国際会議名	(和文)第19回液晶光科学国際会議(OLC2021) (英文)Optics of Liquid Crystals 2021(OLC2021)		
開催期間	2021年9月26日～2021年10月1日		
開催場所	万国津梁館(沖縄県名護市喜瀬1792番地)およびZoomによるオンライン		
参加者	総数 168人	内訳 日本人126人、外国人42人	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	事業に要した経費総額	4,410,708 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加費収入、鹿島学術振興財団「国際研究集会援助」	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	印刷製本費	206,604	201,330
	旅費交通費	610,047	67,170
	通信運搬費(ウェブ、送料等)	96,614	
	会場費	759,000	731,500
謝金	210,000		
消耗品費	257,728		
委託費・雑役務費・手数料等	2,270,715		
合 計	4,410,708	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

# 成果の概要

報告者： 山本 潤  
理学研究科・物理学・宇宙物理学専攻・教授

貴財団による国際会議開催助成について、下記の通り会議の成果概要を報告いたします。

## 記

### 成果概要

国際会議Optics of Liquid Crystal (OLC) は、1986年イタリア・ナポリで第1回大会が開催されたのち、約2年に1度行われてきた歴史のある国際会議である。これまで欧米各国で開催されてきたが、アジアでは一度も開催実績が無かった。OLC2021組織委員会は、開催招致前から開催地の会議場である沖縄県万国津梁館、および沖縄観光コンベンションビューロー（OCVB）の助力を受けて会議の開催準備を行い、2020年4月に国際会議の日本招致に成功した。

一方で、2020年春に始まったCOVID-19感染危惧に対応するため、実行委員会は2021年1月よりHybridでの開催を想定し、会議進行のための技術・操作の検討会を重ねて行ってきた。しかしながら、2021年8月の第5波の感染拡大により、共同主催団体の日本液晶学会理事会から、完全オンライン開催の要請を受け、残念ながらOLC2021国際会議はオンライン開催となった。ただし、大会実施本部は万国津梁館に置き、本会議と市民講座の配信本部を万国津梁館のサンセットラウンジに設置して会議を運営した。

会議初日（9月26日）は、市民講座として組織委員長の山本潤（京都大学）とウシオ電機的那脇洋平氏が、「液晶と光」をテーマに沖縄県の小学4年生から中学3年生の約20名の生徒と、そのご家族を対象に講義と実験実習をオンラインで行った。実験実習用のキットを事前にご自宅に郵送しておくことで、オンライン実習を実現した。この市民講座に続いて、翌日の朝まで、海外の著名な液晶研究者6名によるオンラインチュートリアル講演が行われた。講演

者6名のうち4名は、これまで国際液晶学会（ILCS）の会長を務められた教授であり、2名は、春夏にアメリカで行われている国際光工学会（SPIE）のセッションチェアを務められている教授である。本来であれば、対面で会議に参加いただく予定であっただけに、組織委員会としては、大事な機会を逸してしまっただけに、多くの若手研究者が、海外の著名な研究者の講演をオンラインで聴講し、刺激を受けることができたと思っている。

※チュートリアル講師リスト

講演者	所属	
Prof. Ingo Dierking	University of Manchester, G.B.	現ILCS会長
Prof. Claudio Zannoni	University of Bologna, Italy	元ILCS会長
Prof. Slobodan Zumer	University of Ljubljana, Slovenia	元ILCS会長
Prof. Pawel Pieranski	Université Paris-Saclay, France	
Prof. Hiroshi Yokoyama	Kent State University, U.S.	前ILCS会長
Prof. Iam Choon Khoo	Pennsylvania State University, U.S.	SPIE Optics & Photonics Session Chair

本会議は、9月27日（月）から10月1日（金）まで、万国津梁館を大会・配信本部としてオンラインで開催され、国内126名、海外42名（欧州21名、米国9名、アジア12名）の計168名が参加した。口頭講演は、前述のチュートリアル講演6件、プレナリー講演2件、キーノート講演9件、インバイト講演17件、企業特別講演5件、一般口頭講演41件の計80件、ポスター講演は若手のPD、博士研究員を中心に57件の発表があった。ポスター講演では、朝と夕に同じ講演を2回行うことで欧米と日本の時差を解消した。

本会議の講演内容としては、国際会議のタイトルの通り「液晶と光」をテーマにした幅広い分野の研究発表が行われ、王道の液晶ディスプレイ、高性能光学材料をはじめとして、液晶の欠陥を利用した特異な光伝播、生体組織や自然に関係したソフトマターの非線形現象の研究なども、多数発表されていた。学問分野としても、物理、化学、生物物理にまたがる、化学合成、物性実験、理論・シミュレーションといった多彩な講演があった。特に関連企

業からも5件の招待講演を依頼して、液晶と光に関係した最新の応用研究について講演が行われ、参加者からも活発な質問を頂き、好評を得ていた。

最後に、開催後に行ったアンケートには計58件の回答を得た。会議についての満足度の項目では、「とても満足」が53%、「満足」が39%で、「やや不満足」は8%、「不満足」の回答はなかった。一方で、参加方法については、「是非オンサイトで参加したかった」が33%、「可能ならオンサイトで参加したかった」が49%、でオンライン開催を希望する意見18%を大幅に上回っており、Hybrid開催を模索していた組織・実行委員会としては、残念な気持ちでいっぱいであった。組織・実行委員会は、このような参加者の感想を予想し、合わせて1年後の同時期に同じ会議場でのオンサイト・サテライト会議への希望を調査していた。その結果、「絶対参加する/参加する/予定が合えば参加する」を合わせると、84.2%がサテライト会議の実施と参加を希望していることが判った。このため、組織・実行委員会としては、2022年の同時期・同場所でOLC2021サテライト対面国際会議の準備を進めている。

## **謝辞**

本国際会議を開催するにあたり、貴財団よりいただきましたご支援に対し、深く感謝申し上げます。

以上